

「神経心理学」100号を祝して

河村 満

日本神経心理学会第7代理事長

本号で「神経心理学」は100号を迎えました。第1号からおよそ四半世紀がたったわけです。

本誌100号の記念に、お祝いの文章をくださった歴代の理事長先生方、それに編集後記では現編集委員長森 悦朗先生が共通して「神経心理学」第1号発刊の頃を懐かしく思い出し、それらを読者の皆様に伝えようとしています。本号は特別企画で、特別の意味をもった号なのです。若い読者は是非本号企画すべてを読みとおしてほしいと思います。本邦で神経心理学がどのように始まったかを知っておいていただきたいのです。

本年はくしくもBrocaのLeborgne報告から150年目にあたり、Jackson没後100年目でもあります。この神経心理学創成期の2人の巨人の業績については濱中淑彦先生が詳しく書いてくださっています（特別寄稿）。神経心理学は失語症研究、そして大脳局在論の提唱から本格的に始まったと言うことが出来ます。その後、Brocaは人類学と外科学に、Jacksonはてんかん研究や精神医学にも大きな影響を与えました。神経心理学の創始者たちは広い視野を持っていた方々なのです。そして、何よりヒトの脳と心のあり方に関心があったのです。

「神経心理学」1号から100号までの著者の構成も実に様々な立場がみられます。神経学や精神医学、それにリハビリテーション科、耳鼻咽喉科、小児科などの医学領域以外に、ST・OT・PTそれに心理学や言語学、認知科学、もっと違ったご専門の執筆者もいらっしゃったかもしれません。画像診断法が進歩し、これからは放射線医学などさらに異なった専門を持った著者も大勢出現するに違いありません。神経心理学は様々な立場から、学際的に研究され続けるものと思います。

この号が皆様に届くのは、第35回の宇都宮学会（藤田郁代会長）が終了した頃である、と思います。この学術総会の最後の企画プログラムは、シンポジウム「ALSと高次脳機能障害」です。「神経心理学」第1号が発刊された頃、このテーマを誰が予測できたでしょうか？岩田 誠先生の特別寄稿も神経心理学の新しい可能性を示唆しています。ヒトの脳と心のあり方を探っていくと、思ってもいない、新奇のそれも重要な事実が次々に発見されるのです。

様々な立場の方々が執筆し、多くの立場の方々が読み、議論するのが本誌の特徴です。新奇の問題点について、さらに柔軟に対応し、的確で重要な意見を述べることのできる雑誌にしていきたい、と現理事長の立場から申し上げたいと思います。